

第4回「認知症のある人の福祉機器」 シンポジウム開催報告

研究所福祉機器開発部 武澤友広

平成22年2月28日（日）、センター講堂にて、「第4回 認知症のある人の福祉機器シンポジウム－生活の中での機器活用の普及に向けて－」を開催しました。現在、研究所福祉機器開発部では、認知症のある人（以下、認知症者）に家庭生活の中で実際に機器を利用してもらい、その利用効果や利用に至るまでに必要な支援手法を明らかにする研究を進めています。また、本研究所以外でも認知症者を含む高齢者の機器の活用事例の収集や評価に関する研究が進められてきています。とはいえ、認知症に対応した機器を一般家庭で購入でき、生活に取り入れている欧米と比較すると、日本は普及の面で遅れをとっています。今回のシンポジウムでは、機器の普及に向けた課題を抽出し、その解決の糸口を探るための議論が行われました。

日常生活での機器活用

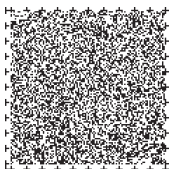
第1部では、まず、種村留美氏（神戸大学医学部）より、『認知機能障害の評価と生活への介入』と題して、認知症のある人の認知機能の評価方法、介入法としての認知改善プログラムや支援技術の活用について概説していただきました。スウェーデンのカロリンスカ大学と共同で行われている、認知症者が在宅でET（Everyday Technology：日常の中で使う機器の意）をどのように使用しているかについての調査研究についても紹介がありました。ETUQ（Everyday Technology Use Questionnaire）という質問紙を用い、MCI（Mild Cognitive Impairment：認知症の前駆状態を表わす用語）の方のETの使用状況や使用に伴う困難を評価することで、機器活用のヒントとなる知見（例：携帯電話に使用法を示すシールやメモを貼付することで使用できている事例）を見出されているそうです。

次に、安藤達也氏（当事者家族）より、『機器活用による1人暮らし

のサポート』と題して、見守り用のネットワークカメラ、服薬の時間になるとアラームが鳴り、必要な量だけ薬を取り出すことができる服薬支援機器、セラピー用人形など、様々な機器を活用して独居生活を営まれている当事者の生活の様子を紹介していただきました。明るい性格のお母様が、発症に伴い自分がどういう状況に陥っているかわからず、情緒が不安定になっていく様子、その変化に戸惑うご家族の様子を克明にお話しになられた後、機器の使用によってご本人や周囲の人々との関係がどのように改善されていたかを具体的なエピソードを交えながら語っていただきました。本研究所でお貸しした服薬支援機器に関しては、実際に使用されている日常のシーンが動画で紹介されました。ご本人がテレビを見ている最中に、機器から服薬時間を知らせるアラームが鳴ります。ずっと機器に手を伸ばし、テレビから目を離さずに機器から薬を取り出し、口に含むご本人の姿が映され、機器が日常生活に溶け込んでいる様子がよくわかりました。ご家族としての感想は、1人で薬が飲めるようになったことが本人の自信につながったのでは、ということでした。

機器活用の普及に向けての課題

第2部では、「生活の中での機器活用の普及に向けて」というテーマで、パネルディスカッションが行われました。司会は井上剛伸福祉機器開発部長、パネリストは大島千帆氏（早稲田大学人間科学学術院）、星野剛史氏（株式会社日立製作所デザイン本部）、小野美登里氏（福岡市介護実習普及センター）、第1部で講演をいただいた安藤達也氏、石渡利奈研究員（国立障害者リハビリテーションセンター研究所）の5名でした。パネリストからの話題提供では、まず、大島氏から認知症者の自宅を訪問して収集した住まいの工夫の紹介がありました。住まいの工夫のポイントは「認知症に伴う不具合と加齢に伴う不



具合に合わせた工夫を行うこと」と「生活の目標と関連づけた工夫を行うこと」の2点に集約されるということです。あるお宅では、リモコンの電源のボタンに赤色のシールを貼っておくと、そのボタンだけは押すことができる認知症者がいらっしたそうです。その方の場合、リモコンだけでなく、給湯器、電子レンジなど他の機器にも赤いシールを貼っておくことでそれらの機器も使えるとのことでした。次に星野氏より、日立製品のユニバーサルデザインの現状について紹介していただきました。認知症への対応はこれからの課題とした上で、「機能をシンプルに、操作ボタンを少なく」「エラーにならない、エラーで困らない」「メンテナンスしなくても使い続けられるように」というこれまで製品開発で考慮されてきたポイントについて事例を交えながら解説していただきました。井上氏からはロボットによる情報支援に関する研究の紹介がありました。ロボットが一方的に情報を伝えるのではなく、認知症者との対話から相手が知りたい情報を汲み取り、それを対話の中で伝える技術開発の進行状況が報告されました。石渡氏からは服薬支援機器の導入時の支援手法についての紹介がありました。難しいと思われた機器の使用法も繰り返し練習することで習得が可能であったり、機器自体に説明書きを書き込んだり、といった導入を円滑にするポイントが挙げられました。小野氏からは福岡市介護実習普及センターにおける市民の方に向けた介護知識や技術、及び福祉機器の普及事業についての紹介がありました。認知症に関する取り組みとして、先進的に服薬支援機器や探し物発見器などの認知症者を支援する機器の展示を始めたとのことでした。

話題提供の後のディスカッションでは、普及を阻む問題点とその解決の糸口について議論が行われました。「機器の使用に伴うリスクを介護者はどのように判断すればよいか」という問題に対しては「医師等の専門職、支援者のネットワークなどからの意見を参考にして、機器の使用に伴うリスクとベネフィットを評価すること」という解決案が提示されました。この他にも、「機器を売って儲かるのか、あるいは、税金や介護保険を使うとしたら、機器はそれに見合うものか、といったコストの問題をどのように考えるか」や「機器の普及が進んでいる北欧と日本との間で大きな違いはどこにあるのか」等の議題が取り上げられました。

第1部では、機器活用の成功事例が紹介され、普及に向けて希望の灯が見えました。第2部では、機器の普及に至るまでには、まだまだ解決すべき課題が山積していることを確認しました。安藤氏が講演の中で挙げられた「一灯照隅、万灯照国」(*)が示すように、これらの問題をみんなの問題として共有することで社会全体を変えていきましょう、と決意を共有し、シンポジウムは閉会を迎えました。最後に、開催にご協力いただきました皆様、休日にも関わらずご参加いただきました105名の皆様に、この場を借りて御礼申し上げます。

※安岡正篤氏の言葉。意味は、「一人ひとりが灯火を掲げて、自らの受け持つ一隅を照らす。一隅を照らす人が次第に増えてゆき、やがて万の灯となれば、いずれは国全体を照らすことになる。」

新しくなった発達障害情報センター 情報共有システムについて

研究所 発達障害情報センター

発達障害情報センター（以下当センター）が国立障害者リハビリテーションセンター（以下国リハ）に移管されてから1年4カ月が経過しました。これまでも国リハニュースを通じて当センターの紹介を行ってまいりましたが、今回は、本年1月20日にリニューアル公開したウェブサイト（<https://www.rehab.go.jp/ddis/>）とその基盤となる情報共有システムについてご紹介いたします。

発達障害情報センターの使命と情報共有システム構築の目的

発達障害情報センターの使命は、発達障害に関する最新かつ信頼できる情報を収集・分析・蓄積し、広く普及啓発活動を行うとともに、発達障害者支援に関するニーズや新しい支援手法等について調査、研究することにあります。情報提供の対象は、発達障害当事者とそのご家族、発達障害を専門とする支援者、発達障害を専門としない支援者、一般国民と多種多様であり、乳幼児期から成人まですべてのライフステージにおける情報提供が求められています。また、関連する分野は保健、福祉、療育、教育、医療、労働など多岐にわたります。さらに、啓発活動のみならず、調査・研究を推進するために、関連機関における情報の共有・利活用が求められています。こうした多様なニーズに答えるため、新たな情報共有システム（以下新システム）を構築いたしました。

従来のシステムはポータルサイトとして情報発信のみの機能でしたが、新システムでは情報発信のみならず情報共有の場を提供できるようにしたことが大きな特徴です。また、新システムを使ってリニューアルした一般公開用のウェブサイト（以下当サイト）

では、より分かりやすくより使いやすい情報源となるよう、コンテンツを再編集、追加作成いた

しました。本文の後に「新しいウェブサイトのご紹介」としてまとめた図（図1）を掲載していますので、ぜひご参照いただき、当サイトをご利用ください。

情報共有システムの機能的特徴

情報の発信、提供、共有、利活用を支えている主な機能を紹介します。

(1) 情報発信・提供

当サイトでは、コンテンツ及びデータファイル（PDF等）を提供しています。掲載情報について、電子媒体としてはもちろん、紙媒体でも必要な時にすぐに利用してもらえるように、簡易に本文が印刷できる機能を提供しています。

(2) 情報共有・利活用

アンケート機能及び問い合わせ機能は、ウェブサイト閲覧者による入力を可能とする機能で、インターネットを介した情報収集が可能となります。また、新システムには、ユーザIDとパスワードを入力しないと入れない会員専用のウェブサイトを構築する機能があります。この機能を使用すると、関連支援機関や作業グループ間における情報共有や利活用が可能です。

(3) アクセシビリティ

アクセシビリティとは、ウェブサイトを利用する全ての人が、年齢や身体的制約、利用環境等に関係なく、提供されている情報に問題なくアクセスし、コンテンツや機能を利用できることを意味します。当サイトには、文字サイズ及び表示色の変更機能があり、変更した条件のままページを遷移したり印刷することができます。また、サイト上で提供しているアクセシビリティ支援ツールの使用により、コンテンツの音声読み上げやふりがな表記が可能となります。その他、サイトマップや全文検索機能を提供しています。

(4) ユーザビリティ

ユーザビリティとは、ユーザがその目的を効率よく達成できるためのウェブコンテンツの使いやすさや分かりやすさのことです。情報の受け手となる閲覧者が多種多様であるため、アクセスの入口を利用者別、ライフステージ別、カテゴリー別、検索（キーワードから入る）と複数提供しています。また、携帯電話からアクセスすることも可能です。更新情報を簡単にまとめて配信する機能（RSS配信）を利用いただくことで、タイムリーに情報を入手していただくことができます。

コンテンツの再編集

当センターは、情報の発信、提供、共有、利活用にあたり、閲覧対象者別に次のようなコンセプトを持っています。

- ・当事者・家族が、情報を得て、安心して暮らせるようにすること
- ・支援者が、標準的な支援方法を知ることによって落ち着いた対応ができるようにすること
- ・自治体関係者が、担当業務の垣根を越えて、発達障害に関する様々な制度や通知などを把握できるようにすること
- ・国民全体が、発達障害について正確な情報を知り、当事者・家族の訴えを正しく受け止め、互いに安心して生活できるようにすること
- ・海外在住者が、日本の支援制度などの最新情報を正しく知ることができること

こうしたコンセプトに基づき、それぞれの対象者が効率よく有用な情報にたどりつけるよう、コンテンツを7つのカテゴリーに再編集しました。はじめの3つのカテゴリー（「発達障害に気づく」「こんなとき、どうする？」「発達障害を理解する」）では、発達障害に関する基礎情報を掲載しています。それぞれ、日常生活の中で障害特性に気づくこと、診断前支援を目的とした事例紹介、誤解のない障害への理解を目的とした情報を提供しています。続く2つのカテゴリー（「発達障害者を支える、さまざまな制度・施策」「日本の取り組み・世界の動き」）では、発達障害に関する制度の情報を提供しています。発達障害と付き合いながら生活していくため、制度や

利用できる福祉サービスを紹介することを目的としています。「相談窓口の情報」では、発達障害の相談や支援を受けることができる相談窓口として、地域発達障害者支援のキーステーションとなる全国の発達障害者支援センターをご紹介します。最後の「発達障害に関する資料」では、「すぐに探せて、手に出来る」発達障害の詳細情報を提供することを目的として、公的機関で作成されたガイドブック・マニュアル及び国の助成で行われた研究の成果物等のデータファイルを紹介しています。

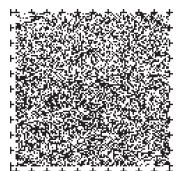
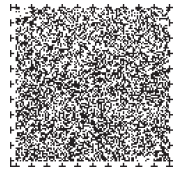
今回、カテゴリー分けを変えただけでなく、新しく支援者の方に向けたコンテンツも追加しております。ぜひ、ご活用ください。

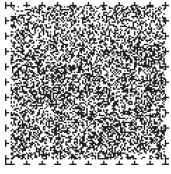
当サイトのリニューアル後の状況と今後の展望

当サイトでは、アクセスログ解析により、ウェブサイト閲覧者の傾向分析や効果分析等を行っています。当サイトには、平日1日あたり600～750のアクセスがあり、7,000～9,000ページを閲覧いただいています。閲覧元の解析結果から、日本全国からご覧いただいているだけでなく、世界各国から閲覧いただいていることが分かりました。より広い視点での情報提供が求められていると考えています。

また、当サイト上でアンケート調査を実施しています。1月20日から3月16日までの間に111件の回答がありました。回答の約6割が当事者（もしくはその疑い）の方で、残りの4割は発達障害のことを知りたい方や支援者の方でした。アンケート集計結果から、当サイトの使いやすさ、分かりやすさ、信頼性等について、多くの方からご好評いただいていることが分かりました（図2）。また、「役立つ情報が見つかった」という嬉しいご意見とともに、「もっと事例を増やしてほしい」「講習や研修に参加したい」などの具体的な改善点やご希望もいただいております。

今後、こうしたアクセス状況や皆様の貴重なご意見を参考にしながら、情報の質の向上、提供方法の改善、タイムリーな情報更新に努め、コンテンツ





の充実化を図りたいと考えています。さらに、研修・啓発用の動画配信等の機能の開発や、発達障害教育情報センターや全国の発達障害者支援センターと共同して支援ニーズの調査・情

報収集を進めていくことで、より多くの方に有用な情報を提供していきたいと考えています。今後ともご支援のほど、お願いいたします。

文責：小倉加恵子

図1. 新しいウェブサイトのご紹介 (広報用パンフレットより)

新しいウェブサイトのご紹介

<http://www.rehab.go.jp/ddis/>

利用者別入口

ご本人・ご家族の方へ：
ご本人・ご家族の方や一般の方に向けて、子どもの発達過程、日常生活での対応方法や発達障害のある方が利用できる制度などを紹介しています。

支援者の方へ：
発達支援に従事される方々に向けて、現場で気づいたことや対応方法、発達障害のある方が利用できる制度などを紹介しています。

サイト内検索

すべてのページの上部にある「サイト内検索」から、知りたい情報に関連するキーワードを入れることで、情報を探することができます。

RSSへの対応

当サイトに掲載した「新着情報」の見出しと記事をRSSにて提供しています。

ライフステージ別入口

主なコンテンツを、各年代に関連の深い情報に分けて、紹介しています。

- 乳幼児期：**
生まれてから小学校に入学する頃まで
- 学童期：**
主に小学生の時期
- 思春期：**
主に中学生、高校生の時期
- 青年・成人期：**
主に18歳以上

イベント・研修会情報

発達障害に関するイベントや研修会の情報を月ごとに掲載しています。

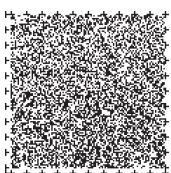
アクセシビリティについて

「文字のサイズ」と「表示色の変更」のメニューがあります。読みやすい文字の大きさ、表示色に変えて、コンテンツをご覧ください。音声で読み上げたい方や、ひらがなで読みたい方は、ウェブ・アクセシビリティ支援ツール「WebUD」をご利用いただけます。

コンテンツのご案内

- 発達障害に気づく**
日常生活において、発達障害に気づくための基本的な情報についてご紹介します。
- こんなとき、どうする？**
発達障害のある方の特性に応じた、生活場面での対応などについてご紹介します。
- 発達障害を理解する**
発達障害の特性やよくある誤解など、みなさんにわかってほしいことをまとめました。
- 発達障害者を支える、さまざまな制度・施策**
保育、教育、就職、生活に関して、発達障害のある方が活用できる支援情報を提供します。
- 日本の取り組み・世界の動き**
発達障害に関する日本の施策や事業、各国の情勢についてご紹介します。
- 相談窓口の情報**
お住まいの地域にある、発達障害に対応する相談機関をご紹介します。
- 発達障害に関する資料**
ガイドブック・マニュアルなどの資料や、最新の研究をご紹介します。

当センターでは、インターネットによる情報の提供をおこなっており、お電話でのご相談やご質問はお受けしておりません。お困りごとやご相談などは、最寄りの市区町村の担当窓口、もしくはお住まいの地域の発達障害者支援センターなど相談窓口までお願いいたします。



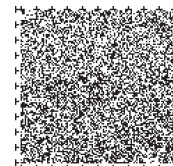
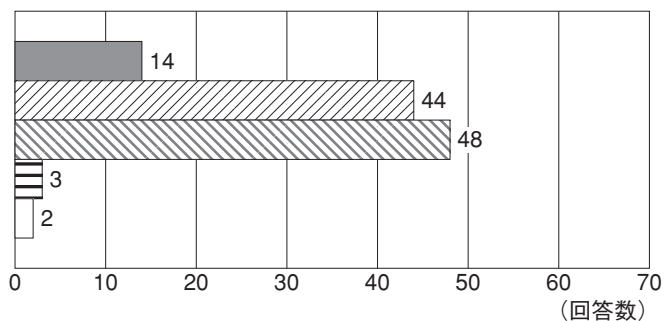


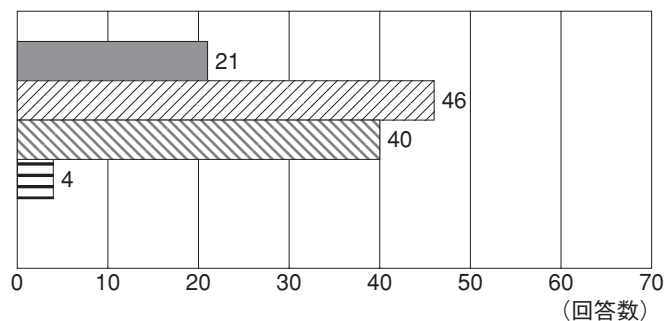
図2. 当サイトのウェブアンケート集計結果

(1)主観的満足感の評価：

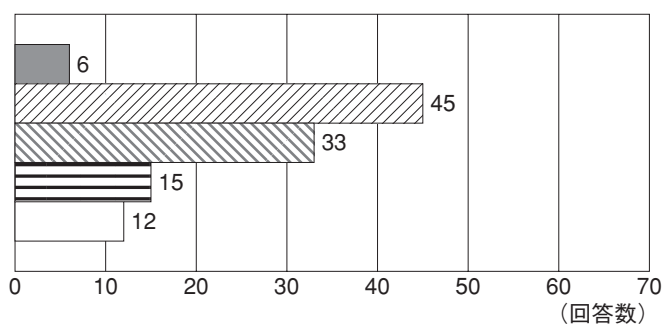
好感度（親しみやすさ）



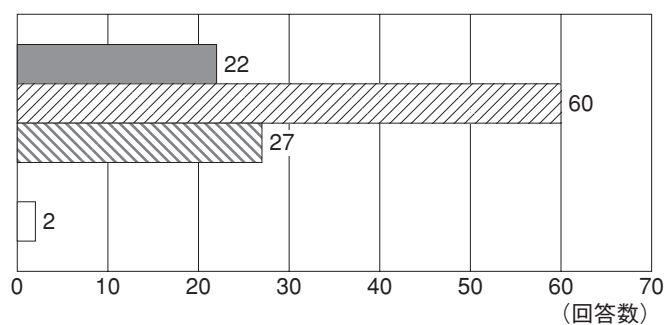
役立ち感（ことばの分かりやすさ）



役立ち感（情報の見つけやすさ）

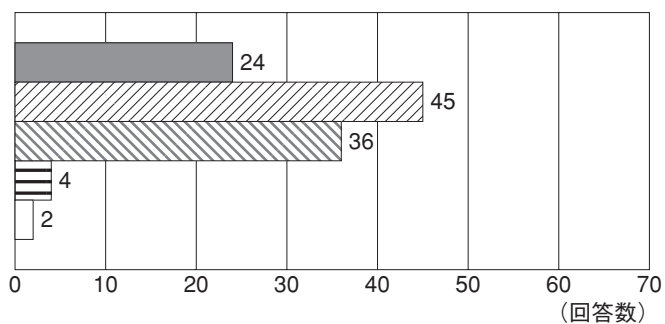


信頼性

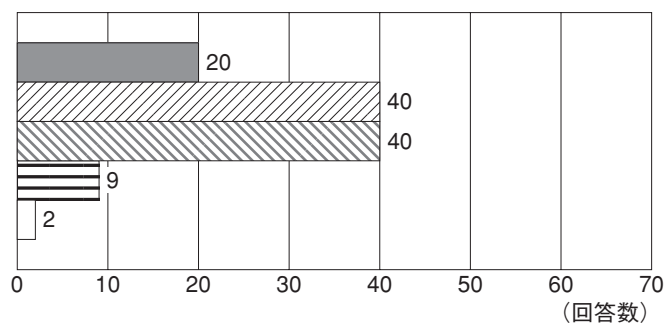


(2)使いやすさの評価：

操作の分かりやすさ



構成の分かりやすさ



見やすさ（行間、レイアウトなど）

